

イメージフォーラム・シネマテーク No. 1087

誉田千尋 117

2025年10月17日（金）- 20日（月） 14:00 - 20:00 (17日のみ17:00~20:00)

イメージフォーラム3F 「寺山修司」

当日受付：一般700円／イメージフォーラム会員500円

協力：ダゲレオ出版

展示協力：humu

展覧会の実現にご協力いただいた皆様に御礼申し上げます。

アーティストトーク

10月17日（金）20:00 - 20:30

ゲスト：川添彩（映画監督）

作品

117

3階「寺山修司」

コンピュータ制御された音響とシングルチャンネルビデオ、電話機、時計、電球 / 時間可変ループ / 2021, 2024

撮影：小濱文雄 撮影助手(カチンコ)：浅尾楽 英語字幕翻訳：Charlton Walters

『117』は、NTTの電話時報サービス「117番」をモチーフにした「実験映画」ないしはメディアインスタレーションである。

展示空間には投影された映像、スピーカーからの音、少し離れた場所に旧式のダイヤル式電話機と、現在時刻を示す時計がある（2024年版では、映像と同期して点灯する電球が加わった）。映像には男が写っており、光と音の信号を合図に、2種類の動作を行う。ひとつはマイクに向かって、映像再生時の日付と時刻を喋ること。もうひとつは電話をかけること。「時報男」が電話をかけると、展示空間の実物の電話のベルが鳴る。もしそのときに観客が受話器を上げたら、男の声で、117番ふうの時報音声が聴こえる。男が読み上げる時刻は秒単位で時計とシンクロしているはずだ。しかし、しばらく映像を見ていれば、それがループ素材であることがわかる。

作者の扮する「時報男」は情報社会を生きる人間の青ざめたカリカチュアであり、技術的な時間を身体に内在し、接続と同期を永遠に繰り返す。

接がれた声 2020年9月11日-2024年11月28日

2階 通路

録音 / 25分 / 2025

作者は2020年から、「ア」という引き伸ばした母音を毎日録音するという日課を自らに課した。録音する声の音高は前日に録音された声の高さが模倣され、前日に録音を忘れた場合はあたらしい音高で録音が再開された。母音の発声の前には録音日時と場所が囁かれた。録音された音声は、「声を接ぐ」と題したウェブサイト（現在は休止）にその都度アップロードされた（録音ルールは数回変更している。ここでは最終的に定着した方法を挙げた）。今回のイメージフォーラムでの展示にあたり、2024年に録音を中断するまでに録りためた1500日以上の音声データからそれぞれ約2秒ずつ波形を抜き出し、録音順に切れ目なく繋ぎ合わせてひとつの「声」に仕立てた。

人間の生と録音・再生（不死性）、日記的な制作手法への関心は、『117』の制作にいたった背景（大きな断絶も含めて）のひとつである。



誉田千尋 ほむたちひろ

1992年愛知県生まれ。岐阜県在住。多摩美術大学映像演劇学科を中退後コンピュータ音楽を独学。情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] 修士（メディア表現）。

2010年代初頭から表現活動を開始。映画のためのサウンドデザインや電子音響音楽で評価を得る。

2023年、これまでの活動を総括し、「誉田千尋」名義で活動を再開。音と環境への「批判的な没入」をテーマに、音響再生産メディアを使用した作品を制作している。

www.homuta.xyz

近年のおもな発表

2025 小個展 ゆっくりラジオ（岐阜市 bicafe）

2024 DX時代のメディア表現 ——新しい日常から芸術を思考する（岐阜県大垣市 ワークショップ24）

2024 個展 117／トークイベント ゲスト：金子智太郎（愛知県立芸術大学）（6月15日）（岐阜市 bicafe）

2024 Contemporary Computer Music Concert 2024（オンライン）

2023 イメージフォーラム・フェスティバル 2023 東アジア・エクスペリメンタル・コンペティション

2023 レクチャー＆パフォーマンス「波音と夏の午後」（豊田市美術館）

2023 個展 霽公鳥 ほどゝぎす（岐阜市 bicafe）

サウンドデザイン等（抜粋、すべて林暢彦名義）

2025 川添彩『幽明の虫』/釜山国際映画祭2025 / 音響デザイン

2025 斎藤英理『Social Circles』(2023) / 惠比寿映像祭2025 ほか / 音響デザイン

2024 川久保ジョイ『Slow Violoncello』/Left is Right –45億年の庭と茹でガエル（丸木美術館）/音響デザイン

2022 池添俊『声を待つ』/第1回ミモカアイ（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館）ほか / 音響デザイン

2022 川添彩『とおぼえ』/ロッテルダム国際映画祭2023 ほか / 音響デザイン

2021 「森へ into the forest」/春日森の文化博物館（岐阜）/音響デザイン

2021 池添俊『きっとうまく話せない』/暗くなるまで待っていて（東京都美術館）/音響デザイン

2021 川添彩『どうが死んだ』(2011) / シアター・イメージフォーラム ほか / 音響デザイン

2020 川添彩『とてつもなく大きな』/カンヌ国際映画祭2020 批評家週間 ほか / 音楽

2019 川添彩『夜の電車』/惠比寿映像祭2022 ほか / 音響デザイン

2016 石田尚志「あいちトリエンナーレ2016」出品作品 / あいちトリエンナーレ2016 ほか / 音楽

2015 清原惟『ひとつのバガテル』/ぴあフィルムフェスティバル2015 ほか / 音響

二種類の「同期」 《117》解題（2024）

2024年に岐阜市で開催した個展で公開した文章。若干の修正を施した。

私が《117》の着想を得、最初の展示を行ったのはCOVID-19が世界的に流行していた2020～21年のことであった。私は幼少から内に抱えていた他者と意思疎通することにたいする恐怖と、コロナ禍で変容した時間感覚や社会のありかたを背景に、技術、時間、コミュニケーションそして音についての「実験映画」を制作したいと考えた。作品の構想にあたり、私は時計、電話、録音が融合した、NTTの117番時報サービスの特異性に着目した。

インタラクティブな要素を含むこの作品を「実験映画」と呼ぶことには理由がある。数奇な縁から、私は映画の音響制作に関わる機会を得たが、そこには音によって映像に「臨場感」や「リアリティ」をあたえるための修辞的な技法に満ちていた。《117》の一側面はサウンドデザインのための映画であり、その限りにおいて「実験的」である。《117》の体験の重要なポイント（少なくとも作者がそう思っている）のいくつかは、映像とサウンドトラックに関する私たちの習慣と、音響化されたコトバの力に拠っている。マイクを持った男がなにか喋っていると思うのは、あなたがスピーカーの音とスクリーンの映像とを無自覚に関連づけているからである（実際には、男の映像と声は別の時間に別の場所で収録されている。いわゆるアフレコである）。映像は一時的にフリーズすることがあるが、それに気づかないのは音が切れ目なく流れているからである。受話器から聞こえる時刻の正確さに驚いたとしたら、それはあなたがその言葉の内容を理解できていたからである。

午後5時46分30秒をお知らせします……。「お知らせします」とはつまるところ、どういうことなのだろう？ それはある刻限の到来を報せる。だが、それに連れて、合成された声の主の、おぼろげな主体のようなものまでもが同時に迫ってくる、そのような修辞的な効果をも「お知らせします」は含んでしまっているような気がする。

インターネットに接続された携帯端末をほとんどの人間が肌身離さず持っている現代では、時報サービスとしての117番の実用性は、ごく限られた場面でしか認められない。私は、現代の電話時報はその無用さと自己言及的な性質ゆえに、ある種の「崇高」の域に近づいているのではないかと思うことがある。それは言わば、電話網上に存在する同期の記念碑である。117番が不要になり、ほとんど忘れ去られたということは、その原理がより精緻になり、不可視で偏在化し、私たちの意識と身体のより近いところに接近していることに他ならない（けれども、その事態が決定論的に、加速度的に進行しているかどうかは私にはわからない）。自己宣伝的な主体を醸成する社会規範とメディア環境が仕掛ける、情報牧場の際限のない同期と接続の中で、117番は私たちの住まう世界の起源のひとつである。映像のなかで時を報せている人物は私（誉田）自身である。私は自ら117番を「演じる」ことで、コミュニケーション過多の時代に生きる私たちの生の一端を示したかった。

ここまでみてわかるように、《117》には大別して二種類の「同期」が混在している。ひとつは想像的な同期で、リアリティを仮構する（広義の）修辞の力に関わるものである。他方は現実的な同期で、科学技術と政治に関わるものである。両者はともに本来の117番に備わっていたものであったが、私はそこに「映画」の要素を付け加えることでそれらを増幅し、異化させた。

なぜ録音するのか（2021）

「声を接ぐ」と題したウェブサイト（現在は休止）に掲載された文章。

自分の声を毎日録音しようと思った

監獄に入れられたり、お金や家がなくなったり、声帯を切除されたり、電気が使用できなくなるような状況にならない限りは、一生続けられる

声は変わってゆくだろう、私を取り巻く環境も変わってゆくだろう、変わらないものもあるのだろう
音の記録をとればその変化のさまがわかるようになるかもしれない

録音データはこのwebサイトで聴くことができる

重ねて再生してドローンにしてもいい

初期の録音術は死に取り憑かれていた
死体から摘出した聴覚器官を機械に接合し、ラッパ型の器具に息を吹き込んだ人々は、人間の死後に残された虚ろな声に戦慄した

私が死ぬまで毎日自分の声を録音し、このwebサイトにアップロードするか、スピーカーを置いてどこか実空間で連続再生するか、何であれ人の目や耳の届くところにそれを置いておくことができたとしたら、その録音の総尺は私の生きた時間の総体と等しくはないにしても、私は録音された声の連なりとともに生き、声の終わりとともに死んだということになるだろう

私が消えたらサーバーの更新手続きは誰がするのか

そのときはそのときだ

自分の声を標本化（サンプリング）し続けるというおこないは、誰でもできることだが、改めて意識化すると気味が悪い

ひとは容易に標本になる

情報にもゴミにもなる

「音楽は空中に消え、二度と取り戻せない」というエリック・ドルフィーの声は、《Last Date》のB面で永遠に繰り返される

「接（つ）」がれた声は、言葉のうえでは、声を発した「私」の同一性を保証するかのように響くかもしれないが、本当のところはどうか

録り続けなければわからない

が、とまれ、私の関心は、ある「私」の永続性などではないと思う

新しい声が重なり、音の持続が延長されるごとに、それらの声の総体は、総体として、異なるものへと変化してゆくのではないだろうか

それは聴くことができるもののなか

私は自分の声が途切れる時を想像する
私は毎朝声を録るが、自分の声の「終わり」を知らない
しかし、あなたはすでに聴いているかもしれない

こんにちは、ごきげんよう
生きている私にとって、この計画は永遠に未完成というべきなのか
それとも、今朝録音した声と明日録音するかもしれない声との間で、計画はとりあえず完成しており、私はとりあえず死んでいることになるのか